

KJ法の原点と核心を語る ——川喜田二郎さんインタビュー

川喜田二郎 川喜田研究所 Jiro Kawakita Kawakita Institute
松沢哲郎 京都大学霊長類研究所 Tetsuro Matsuzawa Kyoto University
やまだようこ 京都大学教育学研究科 Yoko Yamada Kyoto University

要約

フィールド科学と質的方法論の開拓者である KJ 法創始者の川喜田二郎さん（1920- ）にインタビューをし、現場の語り口を生かして要点をまとめた。KJ 法の発想の原点には、今西学派の特徴である未知への冒険精神と、生きた世界に実践的に関与しながら認識するという根本姿勢があった。方法論の基本的特徴には、次の 6 点があげられた。1) 現場取材と創造的総合の二つからなるフィールド科学。2) ありのままのデータからボトムアップで認識する方法論。3) フィールドノートではなくカード記述によって自由で多様な組み合わせの可能性。4) 意味を重視した文章見出しの多段階使用。5) 雑多なデータを図解化によって統合。6) 図解化と言語化による提示と衆目評価による合意形成。

キーワード 質的方法, KJ 法, フィールド科学, 図解, 創造性

Title

Emergence and Essence of the KJ Method: An Interview with Jiro Kawakita.

Abstract

The interviewee, Jiro Kawakita (1920-), is the creator of the KJ method and a pioneer in field studies. The KJ method is a creative, qualitative method that incorporates the following six concepts: 1) Two aspects of field studies: (a) interviews and observations in the field, and (b) the creative synthesis of field data; 2) Bottom-up: construction from data to theories; 3) Description using cards: free manipulable, allowing multiple combinations; 4) Meaningful integration of a gradual index using miscellaneous data cards; 5) Synthesis and composition using illustrative diagrams; and 6) Shared understanding and estimation using both diagrams and verbalization.

Key words

Qualitative Method, KJ Method, Field Science, Visualization, Creativity

話し手：川喜田二郎
聞き手：松沢哲郎、やまだようこ
日時：2002年2月9日 14-18時
場所：京都大学 教育学研究科
やまだ311研究室
記録：DVR, ATR
文責：やまだようこ

今西錦司さんとの出会い

*地図がない、ほんで私は行きたくなくなった。

松沢 最初に今西さんとの出会いについてお伺いしたいです。2002年は今西錦司さんの生誕百年です。それで3年ほど前から、みんなで集まって、お祝いの会をしようということになりました。その準備をしているとき、気がついたことがありました。それまで全部自分で考えてユニークなオリジナルな研究をしようと努力してきた、その結果としてアイというチンパンジーの研究ができた、いやほとんどそう思ってたんですよ、正直に言って（笑）。だから自分は、誰かの世話になったとは思っていなかった。山登りでは、今西さんのおかげと思ってたんですけど。学問で言えば、別に今西さんから何かを教えられたわけでもないし、世代も違えますしね。

川喜田 うんうん。

松沢 自分は自分でやってきたと思っていた。けれど、生誕百年のお祝いをしようと思ったころから、やっぱり今日あるのは…、だって早い話、霊長類研究所は誰がつくったかっていうと、それは今西さんたちがつくったんですよ（笑）。全くなんにもないところからね、野生の猿を見ることを学問にした、で、研究所があった、そこに私が大学院を出てポツとはいった。チンパンジーを研究できたから、今日の自分がある。その前提を考えると、やっぱり今西さんをはじめとする先人たちの努力がすごく大きかったなといまごろ気がついた。孫悟空が地の果てまでいったと思って、私

はこういう研究をしたと思って帰ってきたら、お釈迦様の手の中だったと。それと非常によく似た感じをもちました。

川喜田 今西さんというのは、僕は非常に好きでしたね。私が京都一中の二、三年生の時だった、白頭山の冬の探検のあと、先輩だから京都の一中に講演にこられたの。

松沢 今西さんも西堀栄三郎さんも、みな（京都の）一中、三高なんですね。

川喜田 そうそう。私も一中、三高出の後輩で。だから、偉い先輩がいるなあ面白いなあと思ってたんですよ。たまたま一中の、旧制だから5年の秋だったかな、もうそろそろ中学卒業する少し前のとき、京都の市バスで今西さんと会ったんですよ。で、おそるおそる話しかけたわけだ。そしたら、そのとき立ち話だけど、実は北山の一番奥に、頭巾山とうきんざんっていう山があるというのね。地図がないんだね。（舞鶴要塞地帯が近かったため。）ほんで、私は行きたくなくなった。地図がない。少なくとも当時は等高線が全部抜いてあった。極秘のために。地図のない山へ登るのは面白いもんだから、「登りに行きます」言うたら、今西さんがすぐに「俺も行く」っていうから。それで卒業する前に二月か三月頃でしたかな、今西さんと一緒に行ったの。それが一番最初のおつきあい。

松沢 バスの中で会ったときは、川喜田さんは今西さんを知ってるわけだけど、今西さんのほうは知らなかった。それを、勇気を出してしゃべりかけたわけですね。

川喜田 その通り。私はあと2人の友達、今西さんは後輩を誘って、結局5人でいったのかな。今の美山町みやまちょうですわ。そこに今西さんが前から知っている土地の人が居たの。学校の先生だったな。そこへ泊まったの、一緒に。そしたら晩になったらもう、エッチな話ばかりしてた（笑）。こっちは純真な中学生、それを前において。

それで、まあ面白いことありましたな。山から帰ったら、受験した三高の理科、落ちてたんですよ。京都の一中で卒業生が170名くらい、ところが私、106、7番かそんなもんだわ（笑）。もともと、見込みないんだわ。一番最後、びりっけつが同点2人になったの、どっち採ろうちゅうことになって、三高の教授会で相



川喜田さんを囲んで（やまだ、川喜田、松沢）

談のあげく、私でなくてもう一人の方を採った。こっちの方が体格ええやないか、こっちの方を採ろうやと。私はダメになった。それを聞いたんです。帰ってきてね。ただいまって。そしたらダメや、あ、そうか、なら残念登山やって、僕はそのままリュックサック担いだまままたすぐ引き返して、北山の一中のヒュッテへ行行ってね、一人でごろ寝して帰ってきたの。帰ったら驚いたんだなあ。「おまえ、合格した」って。今年は大高に一人補欠ができたよ。

松沢・やまだ ほう！

川喜田 ぶりっけつに同点が二人いて、最初はダメやと。それで残念登山してかえってきたら、その年どういうわけか大高に珍しく一人欠員ができた。だから、おまえは入れるって。

川喜田 一中の先生は、大高へ入るならこれくらい点数がないとダメと言うようなことばかりいうとった。ところがね、先生が入れんというたのが、2人も続けて入った。もう一人は梅棹忠夫くん。あれが京都の一中で一年の時からずっと一緒。あいつは秀才でね、5年生じゃなしに4年生から特別な枠で合格した。普段はあんまりいい成績ではないけど合格したの。それで、英語のうるさい先生がね、いうんですよ、私に。去年入った梅棹は成績があんまりよくなかったが、それでも英語はよかったと。そしたら、梅棹よりずっと成績の悪い私が入っちゃったから、あの先生、困っただろうなあ。そんなことありましたよ。でも後がよく

ないの。そんな入り方やからね、梅棹も私も大高入って勉強しないの。2年生になったとき梅棹は落第して、私と同じクラスになったの。

やまだ また一緒になったの？（笑）

川喜田 そして、今度はひどいことに、二人そろって落第したの。

松沢 そこからさらに…。

川喜田 梅棹2回続けて落第したから、規則によって追放される。ところが大高は人情があった、学校長は情状酌量してね、抜け穴があったの。

原点 — 生きた実践的つかみとり

- * 死んだ植物標本は興味ない。生きたまま採ってくるの。
- * この世の中をただ映像を見るような感じで見る人間とね、自分がそこで行動者として実践する立場でつかんだのとでは、この世の中のつかみ取り方が違う。
- * この世に生きてる姿勢がね、単なるオブザーバーの姿勢を越えてね、こうまさに生きておる人間として、この世の中とつきあってるといことなんです。

松沢 理科に入って、そのあと京都大学では（文科の）地理学に行くわけですよね。それはどうしてそうなったのですか？

川喜田 それはね、東京大学は地理学は理学部、京都大学は文学部にしか地理学がなかったから。地理学はやっぱり面白いという予感がしたんだ。私自身が歩き回っていたから。一中の山岳部にいたし、植物採集が大好きだったの。博物同好会に入ってた。ところが私の植物好きは変わってる。植物採集して押し葉にして死んだ標本ちゅうのは興味ない。生きたまま採ってくるの。自分とところの庭に植えてた、山野草ですよ、今日の言葉で言うと。要するに生態人類学的感覚があったわけだ。

やまだ そうですね。死物を並べるのじゃなくて、生きた観察。そういう意味では今西さんにも通じるわけですね。

川喜田 京都一中では、昆虫採集が大好きなのが梅棹君。私は植物採集が大好き。それで、一緒につきあって、登山の方も一緒に。

松沢 単刀直入に聞いて、仲良かったですか。

川喜田 うん。仲良かった。そのころは。だけど梅棹の方が秀才やから。

松沢 三高は旅行部に入っていましたよね。

川喜田 山岳部。

松沢 もう山岳部ができてたの？

川喜田 だって山岳部は伝統、古いですよ。今西さんが創始者や。

松沢 あ、山岳部の創始者なんですか。

川喜田 三高の山岳部の黄金時代をつくったのが今西さんたちの世代。

松沢 ふーん。今西錦司、西堀栄三郎、桑原武夫。

川喜田 そうそう。その辺はものすごく仲いいよ。京都の一中も三高も山岳部。

松沢 そうですか。

川喜田 そんで、梅棹と二人とも落第しちゃったから、一回北海道行こうやっていう話になった。私は札幌からずっと日高の海岸を一人旅してね、それから山をまわって、十勝の平野に出てから、てくてく歩いた。そんで、坂本直行さん、絵描きさんの。ちょうど十勝平野に開拓しに入っていたので訪ねたの。

松沢 坂本直行さんは、北大の山岳部なんですか？

川喜田 そう。坂本さんところ行って、3、4日泊まってアルバイトして畑の仕事なんか手伝ったですよ。それから、それ以来いつき合いして。

松沢 でも坂本直行さんもまだ若いですよ。せいぜい10歳くらいなんじゃないですか。

川喜田 そうですね。そんなもんでしょ。

あのね、世界中で坂本さんの山の絵ほど魅力的なのはない。どこがいいかって言ったらね、ただ絵がうまいというだけの絵描きさんと違う。坂本さんのはね、自分がそういう山へ登るという行動者の心をもって描いとる。そこが違うんだ。

やまだ どう違うんでしょうね？ ただ眺めてるだけの絵と比べて。

川喜田 立体感がある。

やまだ 立体感？ 自分で行ってみないと分からないものが描かれている？

川喜田 あるある。十勝側からみた日高連峰、美しいね。あの、稜線が美しい。あんな美しい稜線の山脈ないね。それが坂本さんの筆にかかると、ほんとに立体的なんだ。つまりそれはね、単なる客観的描写ではない。行動的描写なんです。行動者、実践者でないと分からない立体図。現に稜線も美しい。だからね、今でもね、ほんとに打たれるなあ。

やまだ 眺めてて美しいのと、行った人が分かる美しさってどこが違うんでしょうね？

川喜田 それはね、どっかに違いはあるでしょう。

松沢 ふーん。僕も学生時代、毎年北海道へ通って、夏も冬も日高の稜線歩きましたけどね。稜線上に道ないから山を越えて、また向こう側の谷へ降りるとかね、大変なんです日高は。僕らのころでも一番最後まで残ってた秘境だから。そこを絵で描くと、いま川喜田さんのおっしゃったのでいえば、その一つ一つの峰には名前が付いてるし、登山者の視点に立った絵か、そうでないかは、ぱっと見れば、分かる人には分かるわね。

川喜田 その問題だね。

やまだ 単なる山じゃなくて、特別な一つ一つの固有の名前をもった山だということ。

川喜田 つまり行動し、体験するものをもった人間でないと描けない絵なんだ。それは非常に大事です。実はね、こういうことを僕がさとしたのはね、三高に

入って2年くらいたったときだね。ある日忽然とさとした。この世の中をただ映像を見るような感じで見る人間とね、自分がそこで行動者として実践する立場でつかんだのでは、この世の中のつかみ取り方が違うと。もし絵を描いたとすれば絵でもね、本物の絵には本当の立体が出てるんです。その体験のない人の絵は薄っぺらな壁。

やまだ それ、本質的なことですよ。フィールド科学の本質。

川喜田 そのころに三高の2年か3年くらいの時かな。岳水会雑誌という三高の学生たちの雑誌があったんです。そこに僕は原稿を寄稿したんです。そのテーマはね、「絵画におけるリアリズム」という題でね。それはそう長い論文ではないけれど。驚いたことにね、2人の三高の大先生がね、えらいほめてくれてね。それは鈴木成高さんという西洋史の先生と、それから深瀬基寛さんという哲学の先生です。

松沢 それで、君、理科はやめて文学部へきたまえてことになった？

川喜田 (笑) いやいや。

やまだ その野外科学のもとになるリアリティの違いに目覚められたのは、山歩きをしたから分かったというんじゃないで、絵画を見て分かったってことなんでしょうか？

川喜田 それはね、山もあるし、絵もあったと思うんです。

やまだ 現実の切り取り方っていうか…。

川喜田 それもある。この世に生きてる姿勢がね、単なるオブザーバーの姿勢を越えてね、こうまさに生きておるといって、生きてる人間として、この世の中とつきあってるっていうことなんです。

やまだ その場合にですね、自分では山に入らなくても山に対してある種のパッションというか、感情移入して山を見る場合と、実践的にアクティブに行動して山と関わるのはやはり違いますか。

川喜田 違うかもしれない。たぶん違うだろうなあ。

やまだ 違うと思います。

川喜田 しかし共通のところもある。

やまだ アクティブに関わるという点ではたぶん感情移入しても同じだけれども、でも違うと思うんですよ。わたくしも。違うと思うんだけど、どう違うんで

しょうね。

川喜田 その点はね、私が話題にした「絵画におけるリアリズム」という論文のなかにはっきり出てる。そこの論旨は何かというと、普通の人間はね、意識を持つてる人間というもの、自分だけしか意識してない。これはデカルトの立場ですよ。「我思うゆえに、我あり」なんてね。ところが私はものすごく反発したわけです。何いってるんだと。我があるから考えることもするんだよ。

やまだ 存在が先だと。

川喜田 デカルトのような考え方だね、自我意識とその他のものとね、2つに分けられてしまうんです。

やまだ それは先生の「ありのままに在る」というお考えと…。

川喜田 それと関わってくる根本問題。

やまだ 先にありのままの何かがある。

川喜田 そうなんだ。その自我意識のほうが本物であるというのね、基本的に間違っていると気がついた。それが三高の2年くらいのとき。それで、「絵画におけるリアリズム」を書いたんです。絵画を巡ってね、どういう姿勢があるかと。私の姉の一人が絵が大好きだったものだから、その影響もあったと思うんです。

松沢 はあ、お姉さんがいらした。

川喜田 これは絵画論というよりも哲学みたいなものでしたな。

やまだ それが先生の最初の論文になるんですか。

川喜田 そうですね。

やまだ それが一番出発点なんですか。

川喜田 一番ね。そこで私はこの世界に実際にいるんだとね。だから、「我考えるゆえに我あり」ではなく、ひっくり返して、「我あるがゆえに考える」んだと。この問題、今西さんと非常に密接ですよ。本当のすごい画家は、自分自身が対象になりきる、だから外から眺めてるんじゃないということだ。たとえば、ルネッサンス時代ならば、レオナルド・ダ・ヴィンチやラファエロ、我あるがゆえに我考えるですよ。

やまだ 確かに、ダ・ヴィンチは解剖もしたわけで。

川喜田 西洋哲学でも、もうデカルトは古いというでしょう。でも現実の世界見たらどうなの？ その古くさいデカルトの哲学がまだ世界を支配してますよ。結局それではね、この世の中がね、無機的になるんで

すよ。命のある世界じゃなくなるんですよ。それがはっきりでてくると、実存主義的な立場の問題に絡んでくるんですな。

やまだ 落第してたところに、そういうこと考えてたわけですよ。

川喜田 そう、落第してたころ。

やまだ 本はたくさん読まれてた？

川喜田 そのころ、三高の僕らのクラスで、落第生が多かったんです(笑)。みんな、デカルトにだまされて(笑)。

松沢 でも、デカルトについてった人たちは別にそんな落第なんかしないで、悩まなかったと。

川喜田 いや、大いに悩む、大いに悩む。

やまだ それはそれで悩んでいたわけですね。

川喜田 この世の中が、命のある生きた世の中だっちゅう感覚もてないから。

松沢・やまだ ああ、なるほど。

川喜田 影絵みたいなんだ、この世の中が。

松沢 疑おうと思ったらすべてのものが疑えるということだからね。

川喜田 そうなんです。

やまだ じゃ、いずれにしてもみんなすごく悩んでいたわけですね。どういう思想を自分のものにするかと。

川喜田 そう。

松沢 そのときはまだ現象学も、フッサールもサルトルも知らなかったころだから。

川喜田 サルトルもメルロ-ポンティも知らなかった、それ以前です。

松沢 せいぜいハイデガー。

川喜田 そのころの今西さんね、今西さんの生物、生態学はね、その感覚と関係あるの。だから、その今西さんに僕は弟子入りしたみたいなき感じでしたよ。勝手に弟子になっとった(笑)。そうすると、何となく今西さんの感覚が分かるんだよね。それで、生物の世界が。

松沢 そうそうそう、『生物の世界』がちょうどである頃ですよ、1941年だから。

川喜田 そうなんだよ。『生物の世界』はやっぱりすばらしい本ですよ。

松沢 だから20か21歳の時にその本に接することになりますよね。

川喜田 そうなの。

松沢 あれ、哲学書だもんね。『生物の世界』と書いてあるけれど。

川喜田 それに僕はえらく共鳴したんですよ。今西さんはそのころ西田幾多郎がえらく気に入って勝手に弟子の気分になった。それで、尊敬する大先輩が西田哲学に懲りだしたものだから、私もね、西田さんの書いたもんを、一所懸命読んだんです。

やまだ ああ、そういうふうにならなう方々がつながっているわけなんですね。

川喜田 そのころ西田幾多郎の哲学論が一番新しい本です。今西はいきなりそこから、ものすごく勉強したんです。西田さんをつかんじやったんですよ。その今西さんに私は弟子入りしたんですよ。デカルトのっているのはウソだと。ひっくり返した方がいいと。西田さん、ちゃんと書いてますわ。我あるがゆえに我考えてるんやと。

松沢 今西さんをステップに西田哲学を知ったわけですよ。

川喜田 そう、そうなんです。

松沢 そういう意味じゃやっぱり、今西さんの『生物の世界』というのは青春の書なんですね。

川喜田 そう、すごい本ですよ。そのころにあんなこと、気がつく人はほとんどいなかったな。

松沢 そうだよ。

川喜田 この京大の理学部は動植物学でね、生態学というものすら、

松沢 なかった。

川喜田 あることはあっても、そんなもん、もう全然ばかにされてた。

質的方法と野外科学

*この全世界をね、X軸とY軸ですべて捉えるのが本物で、それが科学的の把握であるというような考え方。そこには何ら生命がでてこない、死んだ世界として扱おう。生命というのはロマンチックなものでね、科学でありませないといわれる。それを根本からひっくり返したろと思う。

*** 定量的に捉えるのも結構です。悪いとはいいませんよ。けれど、定性的に捉えることの方が科学の本道の最たるものなんです。**

*** 野外科学っていうのは、現場からの取材という行為と創造的総合の2つがあって、科学として全体がある。**

川喜田 今だって我々の考え方は少数派かもしれないな(笑)。

松沢 まあ、そうですね(笑)。

やまだ だいぶむかしと違って、少数派ではなくなってきたかもしれないけど、ほんとに自ら実践する人は多くない。

川喜田 だんだん増える傾向にはあるけど、非常に鈍いよな。

松沢 現場へ行行って、そこの現場で自分で考える。まあそういうことだと思うんだけど。

川喜田 それとね。デカルトの考え方では、結局、X 軸 Y 軸で数量的に捉える。座標つくってね。それはデカルト座標といわれているわけだ。いまだに世の中、そこから脱出できてないです。便利やから使ったらいんやけど、考え方でそれにいかれてしまっている。この全世界をね、X 軸と Y 軸ですべて捉えるのが本物で、それが科学的把握であるというような考え方に誘導されてしまっている。そこには何ら生命がでてこない。死んだ世界として扱う、それが科学的ということだと。生命というのはロマンチックなものでね、科学でありませないといわれる。そういうふうの世界の理解の仕方が支配されてる。それを根本からひっくり返したらと思う、私はそう、今西さんもそう。デカルトは古いなんていろいろゆうても、デカルト座標一つでさえ前提は覆ってない。

やまだ そうすると、X 軸と Y 軸の数量的グラフをつくるような思考方法とは違うものにしようとする、それは質は質として切り取るということですか。

川喜田 はい。定量的な捉え方の他に定性的な捉え方、あるはずなんです。それなのに、定性的な方はいまだにね、平安時代と同じですよ。

やまだ・松沢 (笑)

川喜田 まあ、それは科学でなしに文学ですなって、どっか腹の底で笑われてるんですよ。デカルトに負け

てるじゃないか。

やまだ 私たちは、いま『質的心理学研究』という雑誌を発刊しようとして準備しているんですよ。心理学もひたすら数量化への道を走ってきたものですから、科学になるために。科学イコール数量化ではなく、質をなんとかサイエンスにしたい。

川喜田 そうなんですよ。定量的に捉えるのも結構です。悪いとはいいませんよ。けれど、定性的に捉えることの方が科学の本道の最たるものなんです。何で定性的なものを排除しなけりゃならんの。定性的データを使う能力がないっちゃうことだろうかと、からかってやりたくなる。定性的な方法をどうしてやらないのか？そこで大きな問題、科学の三大方法論という考えがでてくる。17 世紀に西ヨーロッパで考え出されたのが実験科学。学問は実験科学よりもはるかに古い伝統がある。だいたい今から 5000 年前。つまりね、人類は言葉を文字にして使ってきた。

松沢 まあ、エジプトとか中国とかね。

川喜田 それが文明のはじめです。文字によってつづってまとめられる。これはね、分析でしょうか。違うんですよ。私はそれを書齋科学と名前つけてるんです。特徴はどこにあるのか。実験と分析に対応してどんな特徴があるか。2 つあります。一つは古典があることです。クラシックが。だからね、お釈迦さんの仏教については、万巻のお経があるし、孔子さん、孟子さんの儒教にもあるし、キリスト教だってある。古典でしっかり勉強してないと、コテンパンにやられる(笑)。もうひとつの特徴は、推論ですよ。推論。古典と推論です。

松沢 書齋科学は英語でなんていうんですかね。アームチェアかな。

川喜田 書齋科学という名は日本語でつくったんです。これは英語訳したければね、アームチェア・サイエンスとでも呼んでおけばよかろう。書齋科学と名前をつければ、実験科学と対等に考えられる。これで A と B とできる。だが、書齋科学、実験科学に入らないもんがいっぱいある。それは、フィールドからデータをとること。ようするに取材ですよ。つまりね、この、ありのままの世界からの取材活動。

松沢 そのまま書いて本出したら、すごく新鮮だな。

やまだ もう書いてありますよ。『発想法』にちゃ

んと全部。

川喜田 ありのままの、この現実の世界から、フィールドワークでデータをとる。こういう学問がなきゃおかしい。しかし、データをとったら、めちゃくちゃいろんなものがありますから、これをどうしてまとめるの？ということになるんです。それはね、分析じゃない。総合なんです。創造的综合ですな。

やまだ 創造的に総合しようとしたときになぜ、数量化ではなくて質的方法が必要なんでしょうか。

川喜田 そこが、問題の焦点なんです。学があるなんて自分で思ってる人間にかぎって、分析という言葉にあこがれとる。なにいつてるんだ。分析は、一つの方法に過ぎない。全然逆の方法として創造的综合がある。創造的综合だと、フィールドワークのデータが全部使えるんです。だから、現場取材と創造的综合で、第3の方法が成り立つわけだ。これに名前つけると、何だろう。それで私は野外科学だと。

やまだ 野外科学がフィールド・サイエンスですね。フィールドワークはどう違うんでしょうか？

川喜田 フィールドワークという言葉はすでに割にポピュラーに使われとるが、それはただ取材活動の半面だけで、まとめの方ゆうてないんですよ。

やまだ ああ、なるほど、ワークの方だけで。

松沢 じゃあ、野外科学っていうのは、現場からの取材という行為と創造的综合の2つがあって、科学として全体があると。

川喜田 そうです。書齋科学あり、実験科学あり、野外科学がある。テーブルだって、脚が3本あるから安定するけど、2つしか脚がなかったらひっくりかえってしまうでしょ。

やまだ そうするとですね、古典的な文化人類学のフィールドワークありますね。エスノグラフィーを最終的につくる、あれはどうなんでしょうか。

川喜田 あれはたぶんに野外科学的ですな。

松沢 たぶんに現場側からの取材ではあるな。

やまだ 取材ではあるね。しかしサイエンスになっているかな？

松沢 それは創造的综合にはなっていないのかもしれない。

川喜田 あとはもう、名人芸でさ。だからね、大地理学者や大文化人類学者や何とかの作品の見事なもの

ありますよ、ああいうのいいんだよ。それはそれで、立派なものができたらいいじゃないかと僕は思う。けれども…。

やまだ 先生が目ざしてらっしゃるその野外科学と、ああいう、文化人類学で伝統的にやってきたエスノグラフィーですね、最終的にかなり分厚い記述をもとに意味づけしたものができるわけですけど。最終プロダクトはよく似てますか、それともかなり違うんですか。

川喜田 いや、たまにオーバーラップする面はあります。それはね、

松沢 今の主張でいったらやっぱりそのKJ法という創造的综合と呼びたいその方法というのはユニークなわけだから、その部分が欠落してるよね。そこを名人芸とおっしゃった。名人芸でそれをやっちゃう大旅行家や大学者はいるだろうけど、エスノグラフィーと呼んでるものの正体は現場での取材は確かにしてるけど、その創造的综合という方法を明確化、意識化したものとしてはないわけです。

川喜田 言葉の問題で説明しましょう。創造的综合でできる作品にいろんな傾向のものがああります。私はそれをモノグラフと呼ぶことが多いです。それはフィールドワークなどでとったデータを使ってそのデータを創造的に総合して、こういう結果になったと書くんです。だから長く書くことが多いですけどね。これは地理学でいうと地誌ですよ。だけど一般論としていうとこれはモノグラフと言っていいたろう。これはいいんだけど、名人芸になってしまう。

KJ法のはじまり

- *フィールド ノートに書いてた。それをカードにした。
- *時、所、出所、作成者。これを4注記という。4注記がついてないデータは信用したらいかんよ。自分のつくったデータでも疑え。
- *日付をインデックスにしておしまいにするってなんか多いけども、たとえ短くてもね文章にする。名詞形ではあかん。一つの見出しが一つのことをダイナミックに訴えるように。

***3枚の訴えのカードを、生きた人間が3人いると思っただけなんです。そうすると要するに君たち3人が言いたいのはこういうことだろうと。**

***そのとき僕は、「滝は乗り越えられる、自分をデータに押しつけることではない、データに従うのだ」とひらめいたんですな。トップダウン型のまとめ方しちゃいかんよ。ボトムアップのまとめ方をしなければならない。**

川喜田 名人芸でもできたらおめでたい。しかし、それを突き詰めていったら、ある日突然、ひらめいたの。それがKJ法。1951年です。

やまだ どうやってひらめいたんですか。

川喜田 そのころ、1951年というたら戦後まもなくですな。みんな腹減らして困ってる。そのころにフィールドワークに出かけたんですね、奈良県の天理の裏山。

松沢 それは、大阪市大で教鞭を執っておられたころですね。大学の地理学の先生になったころ、次、ネパール行くのが53年だから、『ネパール王国探検記』や『鳥葬の国』を書く前ですね。^{タイコファンレイ}大興安嶺探検から10年くらいたって、31歳くらいの少壮の学者だけど、まだ大したことは何もやってない(笑)、そのころですよ。

やまだ 初めて自分の方法論ができたころ、オリジナルな発想が自分の発想として生まれたころですね、きっと。

川喜田 そうです。天理の裏山の都介野村へフィールドワークに行ったんです。奈良県教育委員会の依頼で、みんな近畿地方の学者がそれぞれ思い思いに調査にいったんです。それで、私は私の方で勝手にいったんです。友人の岩田慶治君も一緒にいった。そのときにデータカードに書いたんですよ。私はね、フィールドワークのデータ、その定性的データをカードに書くルールを作ったんです。これ、今でもそのスタイルとってるんですがね。

松沢 それまでは野帳みたいなノートに書いてたということですよ。

川喜田 そう。みんなノートに書いてたんです。

松沢 今西さんも伊谷さんも、フィールド・ノート

に書いてたわけですよ。それをカードにした。

川喜田 それを私は戦後まもなく、1946年にはつくった。図書カード、あれにフィールドワークでやった定性的データを書くことをやりだした。書くなら書き方のルールを決めにゃいかん。それでそのフォームを考え抜いてつくったんです。本文の一番広いところにね、ひとかたまりのデータを書く。そうしてそのデータは要するに何をいいたいのかという要点のイメージを上に行見出しをつくって書いた。

やまだ ああー、すでにもうそのときに一行見出しができたんですね。

川喜田 そのときに一行見出しとか一行サマリーとかいうてたんです。さらにそのカードの下に、時と所と、出所と作成者の名前を書くようにしたんです。それから出所には、この情報はどこから出たのか。自分の目で見たのか、だれそれさんが言うてくれたのか、なんとかいう本のなんページにかいてあるとか、出所をはっきりかけ。最後にこのデータは誰がつくったんや、自分の名前、人に頼んだらその人の名前をかいておく。時、所、出所、作成者。これを4注記という。4注記がついてないデータは信用したらいかんよ。自分のつくったデータでも疑え。なぜなら、書いた当時はそれ全部覚えとる。書く必要ないと思って、めんどくさいから書かないの。それが一年、二年とたつうちに怪しくなってくるんです。そのうち怪しくなるだけならいいが、10年くらいたったら違うふうになりかむ。

やまだ そうなんです。ほんとにそうなんです。

川喜田 そうなったら、もう、弊害だ。

松沢 だから、定性的なデータの信頼性が疑われちゃうわけですよ。

川喜田 だから、あとはね、もっと詳しく身元をはっきりしたいのなら、ナンバー5以後ね、好きなだけ数つくって注記書いたらいいんです。少なくとも、時、所、出所、作成者は欠かすなかれということです。これを忠実に守る。そうすると、データはいつまでたっても自分にとってね、正直に語ってくれます。それから、友達とか他の連中と一緒にやった仕事だったら、データを共有できるんです。信用おけますよ。時がたったらね、自分でつくったデータでも4注記がないデータはあやしいです。他人のつくったデータでも4注

記があったら、それの方が間違いない。

やまだ 自分だから正しい記憶をもっているとは限らないわけですね。

川喜田 だから、私はこのフォーム、基本的な書くルールをつくったんです。そのころ貧乏でしたからね、図書館で使い古しのカードもらってきて裏を使ってきましたよ。今は、これぐらいの B6 というのかな、そのサイズのカードを使っています。

松沢 KJ 法や先生の著作に親しんでる人は、そのカードのことも知ってるけど。世の中一般でいうと、僕が知ってる限りでは、同じ頃に梅棹忠夫さんが『知的生産の技術』という本を書いて評判になった。最近では野口悠紀夫さんの『超整理法』とか。その系譜のなかで、どちらかという『知的生産の技術』で人々はカードの方へいった気がするんですが。誰が家元やどっちがはじめたんかと言うことじゃないんだけど、その梅棹さんのそのカードと川喜田さんのカードは、どういう関係にありますか？

川喜田 それはね、もう、ばらばらにやってたの。偶然にね。そのころ私と同じジェネレーションだったから、偶然でしょうね。梅棹君は自分でやったと思いますよ。私は私で考えてやった。並行だったの。あのころ偶然にそういうことやってた人、他にもいたかもしれない。そして、これが非常にもの言ったんです。

松沢 そういう意味じゃ、今西さんや伊谷さんのフィールド・ノートもすばらしいんだけど、決定的な違いは、共有できることと、その信頼性というか、誰がいつ、どこでという情報が明記されていること、そのことですね。

川喜田 そうなんです。

やまだ それともう一つは、一行見出しが川喜田先生のオリジナルじゃないでしょうか。質を質でまとめて、そのエッセンスを一行で出すというところがすごい。質的データは、ごちゃごちゃして、わけがわからなくなりやすいですから。

松沢 インデックスをつくるという問題。

やまだ しかも、そのインデックスが、図書館の十進法みたいな機械的なインデックスじゃなくて、質のエッセンスになっているところ。

松沢 そう、そのインデックスをつくるのが非常にクリエイティブな、重要な仕事になっている。

川喜田 そんでね、何でも簡単にしてね、日付をインデックスにしておしまいにすることなんか多いけども、それを後に次第に経験によって直していった。何々は何々である式にね、たとえ短くてもね文章にする。名詞形ではあかん。それで一つの見出しが一つのことをダイナミックに訴えるというように。

やまだ そこが最初におっしゃった命というか「生き物」とつながるのですね。

川喜田 関係する。

やまだ 植物を採集するときに死んだ標本をつくるのじゃないというのと同じように、生きた言葉、それを生きたエッセンスにする。

川喜田 そのとおり！ それで、都介野の村の話に戻ります。都介野の村で自分で採集してきたデータ、数十枚あったでしょうね。

松沢 わずか数十枚程度？

川喜田 数十枚だったんです。それを自宅へもってきてカルタのように大机の上へ広げたんす。順番なんかめっちゃめっちゃ。それを左端の行の一番上から一つずつ味わって読んでいったんです。よく読んだら次のカードに移る、また読んだら次へ、読んでいったんです。一回読んだときにはもう何がなんだか自分で書きながらわからんのです。もう、ごっちゃだから。頭の中もごっちゃになってる。ところが、2回、3回、4回目、4、5回目くらいになると違ってくるんです。どう違うのかというね、カード見てるとね、まるでもうひとりの人間が訴えてくると同じだね。あっ、君と非常によく似たことを訴えている友達が確かどこかにいたと。それで紹介してやろうと、こういう気持ちになる。そしたら、このカルタとりの中で、アピールする内容の近いものばかり集めたんです。あちらこちらに集まるんですよ。2枚とか3枚とか、まれに4枚とか。そうすると、隙間ができるわけすな、だいぶ。で、一段目がこうしてまとまった、そのときにごく自然にさ、こういうことがおこった。ここにある3枚の、えらい近いことを訴えてるのはね、何を訴えてるんだろう。それで、その3枚の訴えのカードを、生きた人間が3人いると思ったらしいんです。そうすると要するに君たち3人が言いたいのはこういうことだろうと。それをまた別のカードに赤ペンかなんかもってきて書いた。そして一番上に重ねたんす。で、ク

リップかなんかで挟んだ。

やまだ カードは B6 の形のままで、重ねたんですか。

川喜田 そうそう。ほんで、全部やったら、数十枚あった単位が減るわけですよ。目減りする。そしたらね、2 回目やったらいいわけですね。そしたらまた束が重なってくる。今度はクリップでなく確か輪ゴム使ったですわ。3 回目も輪ゴム。どこまでいったらしまいになるのか？ 数束になるまでやればいいんです。いくら多くても 10 束以内。そのときに私はものすごくうれしかった思い出があるんです。何がうれしかったか。これで何が何かわからんという状態から脱せられると。それで何が何かわからん状態の時に、すぐ私はね、荘子のことを思い出したの。中国の戦国時代の。荘子が渾沌と戦った話があった。やっぱりそこは、京大の史学科（地理学は文学部史学科）にいたことは無駄ではなかった。これは渾沌だ。荘子の悩みの出発点と同じだと。しかし、同時にものすごくうれしかったのはね、その渾沌は今や、越える方法がありそうだといいことですね。最初は何十かに束ねたでしょ。それが数束くらいになると、全体の意味がつかめる。結局人間というのは、数束までになったらね、全体がこう見えてくるんです。

やまだ 荘子の渾沌の話というのは、渾沌という名前の人がいて、その人は目も耳も持たないのかわいそうだから認識の穴をあけてあげようという話なのですね。認識の穴をあけると見えるようになるけれど、生きた身体が分割されてしまうから、かんじんの渾沌は死んでしまうわけですね。だから、川喜田先生の方法は、「渾沌をして語らしめよ」。渾沌を殺さないで、どうしたら創造的総合ができるか。しかも、ぐちゃぐちゃの渾沌そのままではなく、「語らしめる」。

松沢 理解する側の人間の制約によくのつとった方法だよ。7 プラスマイナス 2 という「マジカル・ナンバー7」認知の制約のことだけだ。

川喜田 渾沌をして語ってもらおう。そしたらちゃんとまとまるようになる。これが KJ 法の最初の始まりですよ。材料が語ってくれるんですね。こっちは生意気にもね、材料を征服するとか支配するとかね傲慢なことを考えるのは大間違いですよ。材料が渾沌を語ってくれる、それに素直に従うべきだということです。

松沢 キーワードは、「ヒューリスティック」、つまり「発見の助け」みたいなことですね。10 個以内のもの、5 つ 6 つになると、すーっとこの世界が見えてきたように、渾沌が渾沌でなくなるような形ですんなり理解される。そのとき、こういうことはないですか？ ここが、ごそっと抜けている、ここに本来、カードの束はあるべきだという空白のところが見えてくるとか。

川喜田 あるんです。実際ね、数束の配置でそういうのやるとね、どっかにあるべきものが抜けてるなあ、感じることもあるんですよ。

松沢 当然、時間的な制約もあって、こうやって配置してみると、こういうところが抜けてたよなど。やっぱり二次、三次の調査をこの点についてやらなきゃいけないということが当然あるでしょうね。

川喜田 当然出てくるんです。ファンタスティックにやっても出るかもしませんが、このやり方は根拠のあるファンタスティックです。そのとき僕は、「渾沌は乗り越えられる、自分をデータに押しつけることではない、データに従うのだ」とひらめいたんですね。トップダウン型のまとめ方しちゃういかんのよ。ボトムアップ的まとめ方をしなければならない。

ヒマラヤ研究とモノグラフ

*アーティクル、ブリーフレポート、ラビッドコミュニケーションと、どんどん短くなっている。要するに結果だけは書かれているけれども、その全体が見えたという満足感が得られない。長い論文がもう学術雑誌に載らなくなっちゃいましたからね。それこそね、科学の大問題なんです。

*データがみんな物語る。単なるね、要約とかじゃない。一般論とも違う。全部が独自の声をはなつて、フィールドワークのデータそのものが語りかけるんです。そういう書き方、モノグラフ魂というもの。

川喜田 さあそれから、私は大喜びですわ。あと、1953 年にはじめてヒマラヤへ行くことになった。そ

のときはもう、帰ってきたらこの要領でやろうと。

松沢 行く前から決まっていた。行くときに、図書館カードをもって行った？

川喜田 そのときはね、フィールドノートに書き付けるといふ、今までどおり。ノートをもって帰って、カードに移し替えようと。今から考えるとバカな手間のかかることしたものですよ。ずいぶん時間かかったですよ。なかにはアルバイトの人をお願いしてまで、汚いノートから書いてもらったものもあったけど、ここからここまで（カード）一枚分と言わないとできない。それを丹念にやった。だけどそれやったら、ヒマラヤ行っただけ一回分、何ヶ月かのデータが全部収まった。

あるチベット人の集落だけに私が集中的に滞在調査した。それはそういう自信があったからできたんです。1ヶ月半は僕がちょうどいい時間で、同じ村ばかりに居座った。実に気持ちよくやった。村人とのつき合いも全部データになります。今読んででもその村のデータだけは一番いいですわ。それをまとめてその村について京大遠征隊報告の第三巻にピープルズ・オブ・ネパールヒマラヤというモノグラフを書いた。それを *American Anthropologist*, アメリカ文化人類学の代表雑誌で書評してくれたんです。書評した人は、ヨーロッパのヒューラー・ハイメンドルフ (Fürer-Haimendorf), ヒマラヤ研究の文化人類学者としては当時、第一人者です。

松沢 何を書評してくれたんです？

川喜田 その書評でね、広い範囲をただ、広く浅く書いたところはね、「こんなものあかん」と書いてあった。しかしその村に関しては、「よく 川喜田、こんな些細なデータをよくこういうふう構築したな」と非常に高く評価してくれた。で、僕は初めて、なるほど、第三者からみてもそう見えるの、わかるんだな、と思った。それで、こういうまとめ方をモノグラフと呼びましょうと。

松沢 何か一つのテーマについて、範囲は狭いけれど、深く掘り下げて、その一冊の中に一つの小宇宙がこう描かれているようなものをモノグラフというんですね。

川喜田 そう、うん。

松沢 だから分量でいえば、ちょっとやっぱり長くて、普通のジャーナルのアーティクルに載せるには大

きすぎて、一冊の本にしてまとまるような。

川喜田 その通り。

松沢 もう一つ、非常に面白いと思うのは、あ、ずっと後になってアフリカ地域研究センターができて、それは別の系列で、今西さんや伊谷さんがつくったところですよ。あそこが出してる雑誌は、アフリカン・スタディ・モノグラフ (*African Study Monograph*) なんです。我々も十年前にヒマラヤの学術登山をした。そのときの学術報告もヒマラヤン・スタディ・モノグラフ (「ヒマラヤ学誌」) でしたよ。いわゆる個別の科学というのは、アーティクル、さらにはブリーフレポート、ラピッドコミュニケーションというように、どんどんどんどん短くなっている。要するにどうだという結果だけは書かれているけれども、なかなかその全体が見えたという満足感が得られない。そもそも長い論文がもう学術雑誌に載らなくなっちゃいましたからね。

川喜田 それはいかん。

松沢 長くてもいい、とにかくある全体がうまく描ききれようものをめざしたいな、と。実際そこまでは、なかなかいかなかったけれども。そういう志はありましたね。

川喜田 いや、まったく、その通りです。それこそね、科学の大問題なんです。モノグラフがね、誰が読んだって、おもしろいなあと (笑)。つまらない週刊誌よりよっぽどおもしろいなあとといえるくらいにならなきゃだめだよ。それじゃ、もう一例話しましょう。このモノグラフ問題、重要だから。それはね、三回目にヒマラヤへ行ったときですね。今度はヒマラヤの南側でね、南斜面の山奥で。

松沢 53年、58年で、三回目はいつですか？

川喜田 63、4年にアンナプルナ山の南斜面、シカという村のある一帯を3、4か所見に行って、だいたい8、9か月近く滞在調査したんです。その時のものが、*The Hill Magars and their Neighbours*. (山地マガール族とその隣人たち) というモノグラフになってるんです。一冊の単行本で。

松沢 英文で。

川喜田 英文で。その後またそこへ、今度は村への技術協力のためにいったんです。一つのチーム、率いてね。そのとき、我々の書いたモノグラフをまさかの

時に必要になると思ってね、数冊もっていったんですね。ところが果たせるかな、英国のグルカ兵連隊で役だった。グルカ兵連隊を大英帝国はさんざん過去に利用した。けども英国人がえらいなあと僕が尊敬するのはね、利用だけするのじゃなしにね面倒見がいいんですな。兵隊が村へ帰ってからもね、年金などで努力してますよ。ネパールの首都カトマンズに、グルカ兵退役兵を担当する将軍がいるんです。その人に手みやげに本を持っていった。自己紹介してから、こういう人間でございますが、今後山の中で、こういうところで技術協力をやります、ついでには何かとお世話になるかもわからないので、よろしくお願ひしますと挨拶に行っただけです。それから山の中で、数か月仕事してカトマンズに戻り、また訪ねたの。そしたら、驚いたことにね、ボーイがでてきて、ぱっと姿勢をただして、パターンソン将軍が喜んでお待ちですと言ったんです。パターンソンさんは私の顔を見るなり、「いやー、川喜田教授、よくこられた」って大喜びで歓迎してくださった。「私はあなたのくれた本を序文から最後のページまで熟読した」というの。そして、「あなたの気持ちが多分よく分かる。大変それには共感を覚える」と、ゆうてね、最大限の敬意で迎えてくれた。しまいには、「自分の親友であなたによく似た人間が香港にいるから紹介しようか」とまで言ってくれた。それをまあ丁寧に断ってね。そんでさ、うれしかったの。なぜうれしかったかという、その本は、「ある日ここでこういうことがあった」という、まさにもうあさましいくらいありのままのデータが書いてあるのだから。そんなものが数珠繋ぎに書いてある。どのページみても。だが退屈な本だと思わない。なぜなら、データがみんな物語るからです。単なるね、要約とかじゃない。一般論とも違う。全部が独自の声をはなって、フィールドワークのデータそのものが語りかけるんです。その結果こういうことになりますなあ、という形で書いてある。ただね、そういう書き方、モノグラフ魂というものをパターンソン将軍はよく分かってくれた。さすが大英帝国国だと思った。ほんとにすばらしい。それでね、大いに自信をえた。

松沢 そのモノグラフを英語で書いたこともすごい重要なことですよ。日本語で書いてたら、どんなにすばらしいものでも相手の目には届かない。

川喜田 そうですな。日本人、せっかちだから、速く結論に飛びつきたい。つまりひらたい言葉で言うと、「生のデータをして語らしめるということ」がいかに重要か、トップダウンではない、ボトムアップだ。それが積み重なっていくと、自ずから理論的に学問が発達する。

インタビューやアクションリサーチにおける「ありのまま」とは何か

*** 現地へ行っても観察や取材ばかりが学問だと思ってる。しかし、人間に関してはね、それも非常に重要だが、それだけでは物足りない。こっちがこういう風にてたら相手がこう応える、こういうやり方がある、つまりそれが私の場合には技術協力の形です。**

*** 私がこう考えて、こういう問いを出したら、相手がこうできて結果として私はこう思った、ということまでを、あるがままに記述するわけですね。**

松沢 そういえば、今日まだ話にでていないのは、現場で取材する方法ですね。KJ法で取材したものを総合化する創造的総合の話をしてきましたね。だけど、我々心理学者だからそこに目がいくんだけど、取材というものの技術もあるはずですよ。

川喜田 そうなんです。

松沢 自然科学者であれば、ただ対象を静かに見守るという方法もあるけれども、人間が人間にインタビューする場合でいえば、静観した観察をして記述する場合と、アクティブに問いを出して相手を揺すってできたものを取材する場合と、大きくわけて2つあると思う。現場での取材について何か、こうしてきたとか、こんなこと考えたというところ、ありますか？

川喜田 それはね、ま、いろいろありますね。しかし、第一番に一つ取りあげますと、私はアクションリサーチと自分で名前つけた方法を発表してるんですよ。今までの文化人類学や自然科学では、現地へ行っても観察や取材ばかりが学問だと思ってる。しかし、こと人間に関してはね、それも非常に重要だが、それだけ

では物足りない。こっちがこういう風にでたら相手がかう応える、こういうやり方がいる、つまりそれが私の場合には技術協力の形です。

松沢 そこが技術協力で。

やまだ 非常に実践的ですね。はあはあ。

松沢 普通、心理学者だったら、質問紙かなんか考えてね、こちらがこういう問いをたてて、こういう質問紙を用意したらどう応えたと調べる。それではなくて、その暮らしの中へ直接踏み込むような形での、技術協力。

川喜田 私はそれを英文で書かなきゃならない必要があつて、アクションリサーチという名前を付けたんです。

やまだ そういう方法は、心理学でも一般的にアクションリサーチと言っています。

川喜田 他の人も使っている。ことにアメリカの文化人類学者で有名な人…、あの、人の名前、ど忘れぱっかりするんだよな、このごろ。その人がたまたまね、アクション・アンソロポロジーっていう論文書いてたの。これは面白いなと気にかかったから読んだの。アメリカンインディアンの研究でね、アクションリサーチと同じ思想をやつとるんですな。私よりも2、30年先にはじめてたかもわからない。

やまだ そのアクションリサーチのもうすこし手前なんですけど。先生は、ありのままの自然とおっしゃってますよね。そうすると、インタビューすれば、それ自体が、こちらの枠組みを相手にぶつけることになりますから、相手をすでに変えているともいえるわけですね。そうすると、「ありのまま」ということは、あり得るのでしょうか。インタラクションすること自体がすでにパーティシペイトしている、かかわって相手を変化させているわけですね。

川喜田 今までの学者というのは、こちらに考えがあつて相手に働きかけている場合までも、いかにも客観的な書き方で公開してきた。こちらが何をしたかは、言わないんです。私は、どうどうと、私がこのようなアクションをしたら、相手がこう出たということまでも正直に叙述する。それが本物の学者です。

やまだ それがありのままなのですね。だから、自分がこうしたから相手がこうしたと、自分が何をしたかということも書く。

川喜田 そうなんです。それで、そういうところまで正直にやつて、そのまとめ方も、どうしてこういう結果になったということも正直にやる。絶対にトップダウン型ではなくて、ボトムアップ的に正直にやる。

松沢 記述的な方法を使っているけれど、きわめて自然科学的で、合理的な精神にのっとってるよね。

やまだ そういうことですね。自分を特権化しないわけですから。

松沢 方法をちゃんと、ある意味では客観的に記述しているわけだから。

川喜田 私は、思ったことも書くのです。それははっきり、そう断ればいいんです。こういうデータがでた、で、私はこう思うんだ、それはどうどうと書くんですよ。それも、論文、モノグラフの中に入るのです。

やまだ ふうん、それもあがるがままに。

松沢 私がこう考えて、こういう問いを出したら、相手がこうでてきて結果として私はこう思った、ということまでを、あがるがままに記述するわけですね。

川喜田 そうなのです。

やまだ はあ。私が今まで先生の本を読ませていたでいて、一番疑問を感じていたのは、「ありのまま」、自然の状態のままということ、一体ありうるのかということでした。

松沢 いや今の説明で、僕は非常に明瞭にあるんだなあと思ったなあ。ある意味、ありのままっていうのを客体化して外側の世界にとらえ、あると信じ込むのが、ある種デカルト的。

やまだ だから、自分自身も含めてありのままがあると。でもそれを見るためにはもう一つの外の目が必要ですよ。そうすると、常に入れ子型になりませんか。

川喜田 それはそうです。その生き方でいた方が正直ですよ。それでこれ、決して押しつけがましくならない。それはユーザーの方がそれを読み込んでおけど。

松沢 ユーザーは、入れ子の一番大きいところから見えるわけですから。

やまだ 自分も含めて「ありのまま」というところが大事なことです。それが一番はじめに書かれた論文の論点とつながるところですね。

川喜田 そうです。あれから3回くらいは、かなり分厚いものを書く仕事をやつたけども、どれもね、気

持ちよくやれた。それでね、自分だけ勝手に気に入っているのかといったら、さっきも言ったとおり、パターンさんのように、わかる人はわかってくれるんです。「私」を正直に出すのが、本当のサイエンスだという考えですわ。

松沢 なるほど、本当のサイエンス。

やまだ 本当のサイエンス。

英語で論文を書くということ

***日本語をもって英語というものを知ることによって見えてくるものがある。三点測量といって、3つの視点から見ると、はじめてものの立体感が見える。**

***確かにハンデはハンデだよ。しかし、ものごとはゼロ対100じゃないから、そのハンデにもいいところがある。**

松沢 非常に些末なところですが、いや、ちゃんと私がお仕事の内容を熟知していないからですけども、ネパールの技術協力は、具体的にどういうことなさったんですか。

川喜田 その話をしましょう。第一回の長滞在は、さっきお話ししたように、正味一月半でしたね、一つのある集落、チベット人の村落に住み込んで。

松沢 それも53年の時ですか？

川喜田 ええ53年。2回目が58年の『鳥葬の国』を書いたころ。あれはね、始めから終わりまでね、正直に書いてある。正直っていうか、少なくとも私がノートに書いた通りなんです。でも、あれは面白く書きすぎて言われた。月日がたつほどに面白おかしきストーリーにしたと思われているけど、違う。それはその通りにノートに書いてある。面白すぎる紀行文は信用したらだめと言われるが、そうじゃないね。

松沢 もう一つ、今西さんたちが今の時代から考えても偉いなあと思うのはね、今西さんはカゲロウの棲み分けをちゃんと英語の論文で書いている。それから、「ブリマーテス」という雑誌を、霊長類学の雑誌がまだ世界にないときですわね1957年ですよ。その雑誌を

自分たちでつくって出したんですよ。もちろん英語は稚拙ですよ。けど、ちゃんと野生ニホンザルのモノグラフが英語で書かれてますよね。現代でも、大学の先生でもあまりみんな英語で論文書いていないでしょ。どうして人文地理学的、文化人類学的なモノグラフを、日本語で出すのと並行して英語で発信したのか。それは意識的にしていたのか、あるいは無意識的に今西さんの影響なのか。

川喜田 それはね、今西スクールの影響も確かにあるかもしれませんが。長い論文を全部英語にしなければいけない。いかに英語で書くことに労力を費やしたか。われわれこんなに時間を費やして二重の能力使っているのだから、英語圏の人は感謝してほしい。

松沢 英語は、実質国際語になってきているというのが一つ。もう一つ思うのは、ヨーロッパの会合でね、ヨーロッパの人たちって、日常的にマルチリンガルで育っているから、僕と話す時は英語でしゃべるけども、フランス語の人にはフランス語、ドイツ語の人にはドイツ語に変えてしゃべる。いとも軽やかに。そのときに、ぼつんとなったのがアメリカ人だった。アメリカ人、英語しかわからないから。「あー」と思ったのは、日本語というものをもって英語というものを知ることによって見えてくるものがあること。

やまだ なるほど、マルチリンガル。

松沢 たしか川田順造さんの説だけけど、三点測量といって、日本とフランス語とアフリカ、その3つの視点から見ると、はじめてものの立体感が見える。やっぱりそういうの、あるんじゃないか。だから確かにハンデはハンデだよ。しかし、ものごとはゼロ対100じゃないから、そのハンデにもいいところがあるなあと、最近是这样い風に思う。

図解化の方法

***大局をつくるには下からいくけれど、図解にするときには大局のほうが一番先です。**

***情念的に訴えることを大切にしたい方がいい。そのほうがかえって自分を欺かないんですよ。**



図解を見て語りあう（川喜田、松沢）

やまだ 話はちょっと変わるのですけど。KJ法のなかで、さきほど創造的総合するのにカード化するというお話をお聞きしたのですが、もう一つ図解化が先生の方法論のなかで、すごくオリジナルなものだと思うんですよね。

川喜田 自分でつくった図解をちょうど持ってきてますわ。（ご自身の図解をカバンから取り出して机の上に広げられる。）

やまだ 先生がご自身でつくられた図解っていうのは、これですか！すごい価値がありますね。

川喜田 まあ、私がつくったのは、700数十枚あるんですよ。これはわたしが筑波大学の最終講義用につくったもの。ここに日付1982年の2月16日、筑波の私の家、つくったのは川喜田と書いてあります。ぱっと印象的にわかるように、字でなくても絵を描いてもいいんです。シンボルマークを入れてあるのは誰でもわかりやすくするため。

やまだ あの、先ほど松沢先生が、データにどこか空白ができることはありますかって聞かれましたでしょ。結局、この図解化をすることでそれがわかる。空間配置をするから、どこかに広いところもあれば、くっついたところもあり、それからわずか一つしかないけれども非常に重要な部分もあることがわかる。こういうことが図解化の非常に意味があるところだと思うんですね。

川喜田 ユーラシア比較文明の問題点という、また

大げさなテーマだけど。

松沢 こちらは、川喜田さんが中部大学で89年につくったもの。

川喜田 それはね、上下2冊の分厚い本を読んで、その中から私が注意したところを全部サイドライン引いて、そこからもとのラベルつくって構成したもの。ラベルは、原則としてね名詞だけで終わってるところはないんですよ。何なには、何なにであるというふうには文章で書いてある。名詞だけではね、何をアピールするのか分からない。分からないちゅうかね、間違いやすい。しかし、文章であれば正確で的確に中身を表現できる。だから原則として動詞を使って書かないとだめ。

やまだ その一つのラベルの中になんかたくさん書かれてますが、これは自体が元の一つの文章ですか、それともすでに要約されていますか。

川喜田 要約されています。元の文章に鉛筆で傍線ひいて、そこから要点を的確に書いた。だからこんな読んでみましょか。「イスラム政権発足後まもなくから、教義で押さえられていた個人主義的、血族同派的エゴイズムと、その強烈な相克が中枢部の足下からさえ、次第に再燃してきた」とかね、長いよ。

やまだ そうすると2冊の本に何が書いてあったか、これを見ればわかる。

川喜田 一番大局的にまとめたのがこれです。この大局的なまとめの元になった図解がさらに8つありま

す。

やまだ 図解をつくる順番は、どれが先にできたのですか。

川喜田 これがあとです。大局をつくるには下からいくけれど、図解にするときには大局のほうが一番先です。

やまだ では、図解をつくるときは、図解はボトムアップじゃなくて一番大きいほうが先につくられるわけですか。

川喜田 そう。図解は、下から見ていって最後に数束になったらつくる。

やまだ すべてボトムアップでいくのじゃなくて、トップダウンと組み合わさっているところが、おもしろいですね。

川喜田 これは、全体のインデックスとなる図解です。3とか5とか6とか書いてあるでしょ。

やまだ インデックス図解が一つと、それぞれの最終の山にひとつずつの細部図解がつけられているのですね。

川喜田 説明するときはシンボルマークがあると非常にわかりがいいんです。どんなに複雑な問題でも、人に説明するときにはこのシンボルマークがあるおかげで、実に要領、要点がわかる。できてから見てみると、うーん、ここが渦巻いている感じがする(笑)。だから赤で渦巻きを描いた。ここにね、はとぼつぼが鳴いているような感じがしたらね、鳩の絵かいといったらいいんです。

やまだ なるほど。ほんとに生き物なのですね。

川喜田 ここなんか黄色い点々がぼつぼつ書いてあるでしょ。これ、暑い砂漠の感じなんだ。

やまだ なるほどなるほど。それで点々なんだ。

川喜田 つまり情念的に訴えることを大切にしたい方がいい。そのほうがかえって自分を欺かないんですよ。理屈だけね、ほじくっていると、自ら欺くという危険性が増えるんです。

やまだ 私はこの KJ 法で行われていることをもう少し説明できたらいいなと思うんですけど。学問の方法論として。先生が経験や直感によって発想されてきたことを、学問の方法論として説明できないかと思う。

松沢 発想の裏にある科学的な方法論。

やまだ 科学的な方法論の説明。KJ 法を学問の方

法論とするサイエンスをつくることができれば……。私はそれをやってみたい。

松沢 僕は、実証主義者だからね、ほら最後にできあがった山を数えてみて、みんな7つか8つじゃないか。その数に集約されるというところに、認知的制約があるかもしれない。

やまだ ほんとに、松沢さんは見ているところが違うね(笑)。違うから、そこが面白いんだけど。

他者への説明と衆目評価

* あらかじめ自分の図解を読み込んでおいて、人に説明しなければならない。そのときにこのシンボルマークが役にたつ。

* 普段はバラバラに考えてるでしょ。衆目評価では、住民の声をまとめたもの、ここが大事だということになったら、非常にみな意欲が集まるんです。

* KJ 法を素直にやったらね、仲の悪かった連中でも仲良くなる。合意形成ができるんですな。反対でも、いいですよ。反対であることがわかったら、共通の理解ができる。

川喜田 それからまだ面白いこと。すごく重要なことがあるんです。人前で説明することです。そのときには、あらかじめ自分の図解を読み込んでおいて、自分にある程度こなれた感じで人に説明しなければならない。そのときにこのシンボルマークが意外と役にたつ。人前でそれを指しながら指示棒か何かで指しながら説明すると、すごく時間的に早くできる。

松沢 自分もちゃんと覚えてるし、人にもわかりやすい、そういうことですね。

川喜田 そう、非常にコンパクトに訴えられるんです。図解をもって口頭で説明するとね、非常に中身がよくこなれる。テレビよりも聞いていてわかりやすい。なぜならテレビは図が動くでしょ、説明する言葉とずれるんです。だけど、これは図が動かないから、そこを指しながら言うと、その方がよく分かる。それから、聞いていた人が、全体の意味が分かったが、どこが大事なことだろうと、図解の上で探することができる。つ

まり評価する。一番大事なのはどこの問題か、その次はどこかと、ランクをつけて評価をするんです。一人ではなく、何人かでやると歴然とね、評価の高いところへ集中します。この中で一番大事なのはここだという、みんながそう思ってたところが、すぐ出てきます。評価が図解にともなってはっきりあらわれてくる。この評価のやり方は、「衆目評価法」という名前をつけてある。だから衆目評価までやっておけば、非常に重要だと思ったことは、間違いなくみんな共感してくれる。商売でゆうたら、もうかりますよ、このやり方は。

やまだ 聞き手もある程度賢くなきゃだめなんですよ。

川喜田 あ、そうですね。京都府の美山町^{みやまちょう}で住民の人たちにいろんな意見出してもらって、それでまとめたんです。それについて衆目評価法で、評価したの。そしたら断然ここが大事だっていうのがでてきたんですね。他のどのテーマよりもここに出てくる問題が大事なんだと。それが住民たちの村おこしの急所なんです。僕はそのでてきたのを見て、感心してね、よくぞ住民がここまで考えた、驚いたですな。これなら、必ず命中します。その評価をはずさなければ、美山町をこうすれば元気のいい、気持ちのいい地域になると自信をもっていえますね。

やまだ それは、住民の人たちがそれぞれバラバラに考えてたことが集約されるということですか。

川喜田 そうです。住民もね、普段はバラバラに考えてるでしょ。衆目評価では、まとめられたものがでてくるから、それは住民の声をまとめたもの、そこで、ここが大事だということになったら、非常にみな意欲が集まるんです。だからね

やまだ それ、まとめるのも自分でまとめないとだめですか。

川喜田 自分でまとめようと思ったらね、腕さえ磨けばいいけど。これには、腕が必要。

やまだ 腕は必要ですね。それでは、自分たちが出した意見を誰か他の人がまとめてもいいのですか。

川喜田 自分でまとめなくてもいい。しかし、腕はなくちゃだめですよ。KJ法はまとまりがつかないとだめなんです。

やまだ 自分たちでまとめるプロセスがあるから共感できるのではなく、他の人がまとめてもいいんです

ね。

川喜田 他人がまとめてもいい。美山町の例で言うと、30人ぐらいの集まりで声を聞いたんです。いろんな人の。それを全部採集して、私が組み立てた。で、ABCDEでランク分けして評価したんです。Aというトップランクの重要な島が一つ、圧倒的に点数が高かった。Bは一つもない。C、Dが割に少ない数であって、Eが一番ばらばらっと小さい評価。ダントツだったAの島の内容を読んで感銘したですよ、私。うーん、なるほどなあと思って。美山町のあたりを調べたことあるから、その結果をある程度うなずけるんでね。それを現地で説明した。町の人たちが何を考えてるのか、これがわからなかったら、本当は町長さん、なんにも仕事ができない、予算の無駄遣いになる。衆目評価法は、KJ作品がよくできていれば命中率高いです。東京工大の教授してたころ、学長に頼まれて教授会でやったこともあります。それから、総理府に頼まれて、日本で観光問題が重要になってきたころ、600何十枚の意見をまとめたこともあった。

やまだ 先生、600枚ある時には、この模造紙1枚では収まりませんよね。600枚のときにはどういうふうにして、図解をつくるんですか。

川喜田 図解は、何段階にもなります。おそらくそのときは十段階以上できたかもしれないな。最初の細かいのはね、ガリ版で、A3かなにかのガリ版で図解つくって配っておく。

やまだ で、何段階も何段階も図解つくっていくとき、その一番はじめの600枚からはじめるわけですか。

川喜田 そう。600枚並べたら大変ですよ。

やまだ 大変ですね。

川喜田 そりゃ大変ですわ。このテーブルを4つくらい並べないと置けない。

やまだ 最高何枚くらいまで、やれるんですか。

川喜田 私は一気に、800何十枚。長い間レコードホルダーだったのに、とうとう追い抜かれた。追い抜いたのが日蓮宗の坊さんですわ。その人1200何十枚、一気にやったの。

やまだ 1200枚もあると記憶できませんよね。

川喜田 記憶できない。だが、KJ法はできるんです。

やまだ できるんですか。これがあれと似ていると、

カルタ取りみたいにやるのですか。

川喜田 その通り。ある程度基本的な修行ができてれば。基本的な修行はそんな長いことかからないんですよ。早い人だったら、4、5日あったらね、おおかた基本的な力はほぼできます。それから何回かね、腕磨かないといかんですけど。きちんと修行しないといかんですよ、インストラクターが大事ですな。悪い癖がつかないように。悪い癖とは、せっかくみんなの出した意見とかデータにね、素直に従えばいいのに、自分の好きな方へ勝手に作り変えてしまう、こういう悪癖はだめだ。

やまだ データを謙虚に丁寧によまないで、自分流にやってしまうことですね。

川喜田 正直なのがいい。そんなにでたらめに時間がかかるわけでもない、きちっと素直にやれば、一ヶ月以内にきちっとできるんです。

やまだ 1200枚が1ヶ月くらい。

川喜田 素直な研修が大事ですね。10人の中の1人や2人はね、はじめから筋のいい人、いますね。素直にやる。6、7人はちょっと癖があるね。

やまだ 長年やってこられてどういうタイプの人がありますか。こういう人がKJ法やるとのびるというような。

川喜田 それはね、やってみないとわからない。やったら歴然と分かります。

やまだ やってみればわかる。

川喜田 要するに一枚一枚ラベルに書いた通りを正直にね、まとめたらいんです。10歳くらいでも、それから70歳代で初めてKJ法やった人でもね、素直にやったらできる人は中にはいるんです。だからね、結局年齢とあんまり関係ない。

やまだ すると子どもさん、小学生の5年生くらいでもできる。

川喜田 もし学校の勉強というものがね、本当に素直にKJ法のように、材料やデータの語るままに素直にまとめるという方法は、みんな喜ぶんですな。元気出すんですよ。どうして元気出すかという、個人作業じゃなしにグループでやるやり方もありますから、うまくリードしたら、勉強が面白くなる。そこで、やる気が高まれば、単独でKJ法をやっても、さらに一段と力がつく。そうすると、誰でもが、青春と安心立

命とを同時に獲得する味を覚え出すのです。素直にやったらね、人間はものを考えることを、好むんですね。

やまだ 勉強は面白い、ものがわかるってうれしいことですね。

川喜田 そうだ。それなのに相も変わらず大人が知識の詰め込みばかりやとる。あれは嫌いになれといっているのと同じ。KJ法を素直にやったらね、仲の悪かった連中でも仲良くなる。つまりね、意見を合わす、合意形成ができるんですな。

やまだ KJ法は違った意見でも全部生かしますよね。批判しないで。一つの図解の中に異なる意見が殺されない形でうまくまとまる。だから自分が否定されない形で、しかし他のこういう意見もありますという形で認められる。

川喜田 そうなんです。できるだけみんな生かす。たとえ反対意見でも、本当の反対ならね、ちゃんと図解のときには反対の形になってできます。

やまだ 反対のものははっきりさせるということも大事。

川喜田 反対でも、いいですよ。反対であることがわかったら、共通の理解ができる。

やまだ なんとなく、まあまあいいじゃないかというまとめとは違うんですね。反対は反対でクリアにして、けれども共通理解をするというか。

川喜田 そう。だからほんとの反対やったら、衆目評価法で、どの程度反対か賛成かでくるんです。それに対してはみな一致するんです。その評価は実にね、楽しいんですよ。チャートをつくって、中身がよくできた場合には、みんなが分かってくれます。

やまだ まだまだお話はつきませんが、4時間以上にわたってお話を伺ってきました。先生には本当にお疲れではないかと思います。どうもありがとうございました。

川喜田二郎さんへのインタビューを終えて

松沢哲郎

川喜田さんは、わたしにとっては京大高山岳部の先輩のお一人である。もちろん、「KJ法」という発想法の創始者、『鳥葬の国』などの著作をものしたネパールのフィールドワークのパイオニアと認識している。そうした川喜田さんのおしごとが、今西錦司さん、西堀栄三郎さん、桑原武夫さん、梅棹忠夫さん、中尾佐助さんといった、京大の旅行部（旧制三高山岳部、京大旅行部、京大士山岳会）が生み出した知の系譜と無縁でないことも意識している（補足）。

今西錦司さんは1902年の生まれで、2001年から2002年にかけて、その生誕百年を祝うさまざまな催しがあった。今西錦司さんたちの足跡を抜きに「探検としての登山」という日本の近代登山史は語れない。また今西錦司さんと当時の京大の学部学生たち、伊谷純一郎さん・河合雅雄さん・川村俊蔵さんらの奮闘がなければ「霊長類学」という新しい学問分野の確立は無かった。そういう意味で、探検登山と霊長類学は、今西さんの産んだ双子のきょうだいといえる。

川喜田さんは、そうした今西さん・桑原さん・西堀さんらの世代の薫陶を受け、ともにフィールド・サイエンスの実体を作っていた第一世代の代表的な存在だ。とくに、探検登山を学問的な営為にまで高め、本稿の焦点である「KJ法」の発明と提唱によって研究の方法論を確立した功績は高い。

今回はじめて、その「発想法の発想過程」というべきものをじかにお聞きする機会を得た。本論文は、そのインタビューを要約することなくそのまま忠実に再現している。「何も足さない、何も引かない」、そのままの雰囲気が読者に伝わることを願っている。わたしなりに学んだことを以下に3点に要約したい。

第1は、フィールド・サイエンスだけに限定されないことだが、研究というものに対する基本的態度である。1) 現場での取材、2) 質的なデータを記載する、3) そのデータをして語らしめる、すなわち、あとで付け加えない・差し引かない・変造しない。そのことの重要性を学んだ。

第2は、研究が持つべき基本的方法である。1) だが、いつ、どこから（出典）、何を、得たのか、2)

その情報間の関係をまとめる、3) それにインデックスをつけて、新しいまとまりの単位ループ（ループ、下位カテゴリ）として、階層をあげて同じ操作を繰り返す。それが要点だ。

第3に、そうした基本的態度と基本的方法を貫くものとして、「全体を見るぞ!」というような気迫そのものを感じた。「神は細部に宿る」（ちまちまとしたラベルのひとつひとつに真実がある）という側面とともに、「つねに遠くを見る」という側面、つまり研究という営為の2つの側面をあわせもつ高いモチベーションに心惹かれた。

一言で言って、「82歳、恐るべし」である。得がたい経験だった。最後の「創造的総合」の過程のところで、まだよくわからないところがあった。まず一番大づかみのところから模造紙を作っていくのか、それとも個々のラベルから積み上げて小さい入れ子となる模造紙から作っていくのか、それともレベルを超えて相互に行ったり来たりするのか。もしレベルを超えて行き来するのなら、何をきっかけにレベルを変えるのか。まだまだ質問したいところがあった。でも、それは、われわれ自身が考えるべきことかもしれない。フィールド・サイエンス、とくに人文系の野外科学研究には必須の態度と方法を学んだと思う。愉快的ひとときと、さまざまな示唆を与えてくださった川喜田先生に深く感謝したいと思う。

〔補足〕「フィールドワークと今西錦司」

松沢哲郎

今西錦司という名に触れずに、霊長類学の歴史は語れない。今西は、1979年に「霊長類学の確立」を理由に文化勲章を受けている。今西をリーダーとする京都大学の研究者たちが野生ニホンザルの研究をはじめた。1948年、今からおよそ50年前のことである。

今西は、1902年京都の西陣で生まれた。京都府立一中、三高、京大と進む。三高の同期入学のなかま、桑原武夫や西堀栄三郎たちと一緒に、登山に打ちこむ青春時代を過ごした。ヒマラヤ8000メートル峰がすべてまだ未踏峰だった戦前に、世界第二位の高峰K2への遠征を企てたこともある。1934年には

じめての海外遠征を実現させる。京都帝国大学白頭山遠征隊を率いて、朝鮮半島の白頭山の冬季初登頂に成功した。当時、隊長をつとめた今西は、京大の一介の無給講師にすぎなかった。欲得ではない。今西の夢に呼応して、若い人びとが彼の元に集まってきた。

農学部で学んだ今西は、生物にも興味をもっていた。そして、「登山」という究極の「フィールドワーク」が内包する同根の思想から、死物を扱う従来の「博物学」ではなく、新興の「生態学」に針路を求めた。生物の生きざまをフィールドでそのまま捉える学問である。のちに「すみわけ理論」として人口に膾炙されるようになったウスバカゲロウの生態研究によって、1939年に理学博士の学位を得ている。

あいかわらず京大の理学部の非常勤講師でしかなかった今西は、ダイワアンレイ 40を前にして、立てつづけに二冊の著作を世に出した。『山岳省察』（京都・弘文堂、1940年）と『生物の世界』（京都・弘文堂、1941年）という本である。前者は登山、後者は生物学について、それまでの思索をまとめたものである。

『生物の世界』は、「相似と相異」「構造について」「環境について」「社会について」「歴史について」という5章から成っている。今日の霊長類学の源流をたどれば、まちがいなく今西の『生物の世界』に行き着く。一読してみればわかるのだが、『生物の世界』にはほとんど生物は出てこない。『生物の世界』は、迫り来る第二次世界大戦の軍靴の音を聞きながら、今西が（遺書のつもりで書いた）（日本経済新聞『私の履歴書』から）、この世界の成り立ちに関する哲学書だといえる。「人間とは何か」という問いに対する今西の答え、あるいは答えを見つける道筋を示したものである。

その後、南洋のボナペ島（1941）、中国の大興安嶺（1942）、蒙古（1944-45）、の3回の海外調査を今西は組織した。梅棹忠夫、川喜田二郎、中尾佐助といった京大の若い学徒たちが、一介の無給講師でしかなかった今西のあとを慕ってこうした学術遠征に加わり、のちに学者として巣立っていった。

（松沢哲郎「日本の霊長類学史」2000 エコソフィア、5、48-49、昭和堂より引用。）

関連文献としては、ほかに「今西錦司フィールドワークと初登頂の精神」「フィールドワークのフロンティア」2001 エコソフィア、8、昭和堂など。

KJ法とグラウンデッド理論、そしてインタビューにおける語り手と聞き手の関係性

やまだようこ

私とKJ法との出会いは、大学を出たばかりのころ、心身障害者コロニーに勤務していた1972年にさかのぼる。3泊4日の研修でKJ法のおもしろさに目覚め、その後自分でもさまざまなかたちで使い、授業でも教えてきた。『発想法』は今も演習のテキストに使い、何十回も繰り返し読み返している（やまだ、2003）。

川喜田先生に直接お話を伺うことは、長年のあこがれだった。初恋の人に会うような・・・、こういう気分(1)のときには、期待通りにいかないことも多いはずである。しかし、川喜田先生は、こちらの期待などはるかに吹き飛ばしてしまうほど、何倍も桁がちがっていた。パイオニアのもつ圧倒的な迫力、鶴のような身体から発せられる背筋を通ったパワフルな語り、深く核心に共鳴しひびきあう仕合わせな時間、それはインタビューを終えたあともさらに夜遅くまでつづいた。

このインタビューの成果の一つは、KJ法の原点となった認識論「ものの見方」を明確にしたことだと思う。川喜田先生の最初の論文が「絵画におけるリアリズム」であったことは、KJ法が視覚的イメージを最大限に使用する図解化を特徴とすることからみても興味深い。

KJ法は、フィールドのデータからボトムアップで理論生成に向かう方法論として、『発想法』と同年に出版されたグラウンデッド理論（Glaser, B.G. & Strauss, A.L. 1967）と共通点が多い。しかし、根本的に異なるところは、グラウンデッド理論が、概念的カテゴリーを礎石として概念的に理論構成するのに対して、KJ法では一度バラバラにしたカードの意味的エッセンスをもとに創造的に総合して、図解による新しい「意味連関」をつくりだすところである。要素となるカテゴリーからがっちりした建築物を造ろうとする

方法論と、視覚的なイメージを使ったやわらかな連関図をつくる方法論の違いといたらよいだろうか。

KJ法では、「イメージ」を重視した図解化と、「語り」による言語化による筋立てという質の異なる二つの表現方法が巧みに組み合わせられていることも強みである。カードに記された言葉を、概念的なカテゴリーにするのではなく、一人一人の人間であるかのように、その言葉が何を言おうとしているか、情念をもって耳を傾けるという考え方が、生き生きした発想と、人と人を関係づけるグループワークの思想にむすびつのである。

KJ法はグラウンデッド理論と発展のしかたも対照的である。グラウンデッド理論が、今では質的研究法の古典的位置をしめ多様な展開を生んでいるのに対して、KJ法は「技法」「技術」としては広く普及したが、学問の方法論として理論的、概念的に練り上げてアカデミックな場で議論されることは少なかったように思われる。その生成継承的な発展は、私たちに託された仕事かもしれない。川喜田(1993)より、日本の社会的風土を反省する一つのエピソードを引用しておこう。

たとえば、私の大先輩で西堀栄三郎という人がいた。

日本の南極越冬隊長をやって、のちに茨城県の東海村の原子力発電所の理事をやった天才的エンジニアであった。この人は、世界でまだどこもやっていなかったとき、グラフィイト(石墨)で原子炉を造るのがいちばんいいと考えて、それをトップへ上申した。

するとトップは、「欧米ではやっているのか？」と聞いたので、西堀さんは、「いや、どこもやっていません」と胸を張って言ったら、欧米でやっていないことはやめておこう、と言われたのである。

それから何年か経って、英国で、そのグラフィイトの原子炉を造ったニュースが入ったので、西堀さんは悔しいと思ったが、そのニュースを持って、トップのところに行って、「英国でもやりだしました」と言ったら、トップは、「それじゃあ、しばらく英国がやっているのを見ていて、具合がよかったら、それを輸入することにしよう」と言ったという。

西堀さんは、あとあとまで、このことをたいへん悔しがっていて、残念だと、私に一部始終を話

してくれたのである。「だから川喜田君ね、日本には創造性のある人間がいけないと言われるが、いなのではなくて、本当はたくさんいるのや。それなのに、欧米でなうては、という考え方の人が体制を固めているという社会的風土のために、片っ端から潰されていくのや。創造性のある人間が日本にいないなんていうのは嘘っぱちや…」というのが、西堀さんの述懐であった。

(川喜田, 1993)

さて本論文では、インタビュー・データを生の「語り口」を生かしたかたちでまとめた。録音データのプロトコルを起こしたローデータそのままという意味での「ありのまま」の記録ではなく、「論文」として編集されているが、自分たちの発言も含めたやりとりのプロセスをできるだけ生き生きしたかたちで時間的シーケンスを含めて提示するという形式をとった。

この論文ではインタビューの内容をいくつかに分けて表題をつけ、そこにエッセンスとなる発言を簡潔に記した。このまとめ方には、KJ法の精神が息づいている。人が語る生のことばは、実に冗長である。感動して聞いた話でも、語ったままのプロトコルを記しただけでは、だらだらして読むに耐えない。しかし、また、人が語る生のことばは、実に魅力的である。その人の経験が裏打ちされたことばは、生きが良くつぶがたって光っており、他のなにもものにも換えられない。そして概念化したりカテゴリーに分類したものは違って、胸の中ですっと入ってきて、すんと落ちて、長く記憶に残る。語りの力は、ことばの力である。オーラル・データを論文として言語化するときには、口頭で語られることばの生き生きした力をおとさないで、なおかつ要点を簡潔にまとめなければならない。捨てつつ拾い、生のままで保存バックをつくるという矛盾した作業が同時に求められる。このようなインタビュー論文では、その矛盾は極限に達する。

なおインタビュー記録を『質的心理学研究』の「論文」とすることには議論があるだろう。従来はこのような記録は論文作成のための一次データであり、文書記録や文献よりも一段劣る口述資料としてしかみなされなかった。しかし、最近のライフストーリーやオーラルヒストリー研究(Grele, R.J. 2002など)では、質の高いインタビュー記録は「一次資料」ではなく、そ

れ自体が学問的価値をもつ「成果」だという考え方が強くなっている。

インタビュー記録そのものが学術的成果とされるようになったのは、いくつもの要因があるだろう。従来は「聞き手」の役割が無視されてきたが、語り手と聞き手の関係性や、聞き手の能力が重視されるようになったこともその一因と考えられる。研究者のインタビューと、従来多く行われてきたジャーナリストのインタビューは、目的も方法も聞き方もまとめ方も異なる。目的にあった語り手の選択、語り手と聞き手の関係性、聞き手の専門性や学問的能力、聞き手が複数の場合にはその組み合わせ方、語りの聞き出し方と流れの作り方、語りプロトコルの扱い方、インタビューのまとめ方など、用意周到な知的準備をした学術的インタビュー結果は、ちょうど優れた実験結果がそうであるように、きわめて専門性が高い学術的成果とされるようになってきた。

本論文では、異なる背景をもつ二人の心理学者が、共に川喜田さんの仕事に多大な個人的関心をもち、互いに補いあって相当に突っ込んだ聞き方をしていることが読みとれるだろう。また、語り手がきわだった学者で語りの名手であることに加え、聞き手との関係性も希有で、「語りの現場」で生み出された学術的にも貴重な証言の記録であること、フィールド科学や質的研究の方法論として新しい知見や示唆が含まれていること、インタビューの進展自体に冗長さが少なく内容の密度が高いことなど、インタビュー論文として、めったにない条件を満たしていると考えられた。

川喜田先生には、ご自身がつくられた図解を何種類も京都まで持ってきて見せてくださり、情熱をそそいで語ってくださったことを心から感謝する。

引用文献（やまだ）

- Glaser, B.G. & Strauss, A.L. 1967. *The discovery of grounded theory: strategies for qualitative research*. Chicago: Aldine Publishing Company. 後藤隆・大出春江・水野節夫（訳）、1996、データ対話型理論の発見、東京：新曜社。
- Grele R.J. 2002 Oral history in comparative perspective of Japan, U.K. and U.S. 国際シンポジウム 21世紀のオーラルヒストリー、GRIPS.

川喜田二郎. (1967). 発想法. 中公新書, 東京: 中央公論社.

やまだようこ. (印刷中). フィールドワーク基礎演習カリキュラム: 現場インタビューと語りから学ぶ「京都における伝統の継承と生成」. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 49.

川喜田二郎. (1993). 創造と伝統. 東京: 祥伝社.

人名解説

今西錦司

1901-1992 生物学者。京都大学教授、岐阜大学学長、日本山岳会会長など。ウスバカゲロウの研究から「棲み分け」理論を提唱。独自の進化論を提出し、霊長類学、生態人類学などの基礎をつくった。

西堀栄三郎

1903-1989 化学者、エンジニア。日本初の南極越冬隊長。真空管の開発、品質管理のQC、原子力開発など幾多の創造的開発をした。

桑原武夫

1904-1988 仏文学者。京都大学人文科学研究所教授。共同研究方式を提案し、フランス革命などを研究。

坂本直行

1906-1982 画家。釧路市に生まれ、広尾村にて原野を開拓し、酪農を営みつつ、日高の山々と植物を描いた。

梅棹忠夫

1920- 文化人類学者。初代国立民族学博物館長。豊富なフィールドワークと生態学をふまえた「文明の生態史観」を構築。

(2002.7.3 受稿, 2002.10.18 受理)